

東海大学医学部消化器外科の紹介

当教室は三富利夫先生を初代教授として昭和50年（1975年）に発足しました。診療科名は当時、第二外科で、一般外科、乳腺・内分泌外科、消化器外科、小児外科を担当していました。その後講座制の廃止とともに各科が独立し現在の消化器外科に至っています。平成9年に幕内博康先生が、平成14年には生越喬二先生、平成15年には今泉俊秀先生が消化器外科教授に就任され、食道、胃、大腸、肝胆膵の臨床、研究を担っております。

第15回日本癌病態治療研究会当番世話人の生越喬二教授は、東海大学に赴任して、一貫して、胃班を担当され、胃癌や消化性潰瘍の患者さん達の個人個人に合った治療法は何か？それを予測するマーカーは何か？を検討され、日本癌病態治療研究会の設立にご尽力されたことは、会員の先生方をご存知のことであると思います。

今までの成果か、開院以来の症例で、Stage IV胃癌の非治療症例（712例）の5年以上生存例が34例（4.7%）（内10年以上生存例18例（2.5%））あり、現在、再燃なく外来通院しています。また、胃切除時の再建方法として術後のQOLを考慮した空腸嚢を付加した再建術式や、上部胃癌ではできる限り臓器を温存する目的で噴門側胃切除術および膵脾温存手術を行っています。

食道癌では幕内博康教授が表在癌の内視鏡診断と治療に力を注ぎ、食道癌の分野では日本を代表する症例数を有し、診断・治療において先駆的な立場にある施設となっています。肝胆膵疾患では、今泉俊秀教授が赴任されてから、膵臓癌の症例数が増え、積極的な治療が行われています。

教育の面では全国に先駆けて学生教育に対してクリニカルクラークシップが導入されています。当科では系統講義を1週間行いますが、学生が自分からすすんで考えそして患者さんから学ぶことが重要と考え、病棟実習を3週間行っています。学生は消化器内科・外科合同カンファランス、外科術前カンファランス、術後カンファランスに参加し、外科チームの一員として積極的に診断、治療にあたっています。われわれ教員は臨床、研究、さらには学生教育と日々多忙な毎日を送っていますが、昨今外科医が不足してきている状況でもこの教育のためか毎年数人の入局者を迎えています。